

新型コロナウイルスに負けないために

——ローカリゼーションとグローバルゼーションの統一——

田村八洲夫

1. 石油依存経済による環境汚染が生物多様性を喪失

石油依存の経済が環境破壊を招いているという警告は、米欧日の戦後高度経済成長期の1960年代からなされていた。米国の生物学者レイチェル・カーソンは、1962年に著書『沈黙の春』で、DDT等の石油系農薬の使用によって田園に鳥がいなくなった「情緒を失った石油浸け社会」を告発した。半年で50万部のベストセラーになった。

「田園で鳥がいなくなった」とは、エサを捕食した水棲のアメンボ、トンボ、ホタル、タニシ等の昆虫類や節足類等が、農薬の体内濃集や生息環境の劣化によって死滅し、それらを捕食できなくなったカエル、そして田んぼの魚であるメダカやフナ、ドジョウが姿を消し、次いでスズメ、ツバメ等まで、餌のない田園に飛翔しなくなったということ。すなわち、日本の農村のように、田園地帯で石油文明最盛期に、既に食物連鎖の喪失が下級の動物から鳥類まで及んだ。当然のこととして、換金農業では、農作物に根毛から栄養を供給する土壌の中の細菌やそれらと共生するウイルスが農薬によって多くが死滅して、土壌の劣化と農作物の栄養素の低下に至り、農薬使用の悪循環に陥っている。

さらに今日、海域に流れ出たプラスチックがマイクロに碎けてDDT等を濃集し、それを誤食した魚介類が生物濃集を重ね、最終的に食した人間は精子が減少して生殖能力の低下の恐れに至っている。石油の使い方を間違えることによって、石油製品によって田園の下級動物界だけでなく、食物連鎖の頂点に君臨する人間が「種の存続の危機」に直面している。

1960年代に、最も下等な生物の一つであるコロナウイルスが、ヒトに感染するコロナウイルスに初めて変異した。それから最近では大きな変異が2002年のSARS、12年のMARSに続いて7度目の大変異が2019年に発生のSARS-CoV-2である。コロナウイルスは変異が速く、平均して10年以内のペースでコロナウイルスは人間に対して、より攻撃的になって変異するのではと恐れる。

2. 新型コロナウイルスと感染症の特徴と克服の方策

新型コロナウイルス(SARS-CoV-2)がヒトを宿主とし、その感染症(COVID-19)が急速かつグローバルな感染拡大を起こしている根本的な原因が、経済のグローバル化のあだ花である「異常な人ほどの人々の往来」と「農薬による生物多様性の破壊と食生活の飽食・偏向」にあると考える。

新型コロナウイルスの特徴は、

- ① 感染しても発症しないケースが多い。また潜伏期間が1日～14日と長い。限りある検

査データの統計から、無感染者・無症状者の割合はおよそ 8 割である。

- ② 人の移動がグローバルに頻繁である限り、感染拡大が速い。
- ③ 人の移動がある限り、感染が収束しても、2 波、3 波の感染がグローバルに起こりうる。

次に、感染症「新型肺炎」COVID-19 に対する対症療法として

- ④ COVID-19 の治療薬アビガンの治験を急ぎ、世界中に利用を広げなければならない。また、SARS-CoV-2 に対するワクチンの開発利用に 1 年半とされる期間の短縮を期待する。

さらに、

- ⑤ 変異しやすいヒトが宿主のコロナウイルスに人間が永続的に強くなるには、人間の腸内細菌等を高め、免疫システムを強化することが必要条件だと考える。

そして、何よりも強調すべきことは

- ⑥ 世界のすべての国が、が同時に一丸となって変異するコロナウイルスの災禍を克服し、人類社会が疫病に対してレジリエントでかつ持続的に発展するために、連帯・協力の絆を強化することである。大国が覇権を争っている時代局面ではない。

3. 人間の腸内細菌のバランスを高め免疫システムの強化を

人間は長い人類史を通じて、大型の哺乳類等と比べて身体的な脆弱さを、頭脳の発達と多様な雑食生活で補って文明社会の時代に至っている。人間は食物を有機物の形で摂取し、腸内細菌が無機物に分解して腸の壁から人体に吸収される。一方、摂取する食物は基本的に、人間の行動範囲の土壌で生育・繁茂する可食植物と散在する可食動物である。

一年間で考えると、群れを成す人間集団の腸から吸収する無機質の栄養素と、可食植物が根毛から吸収する無機質の栄養素は、同等と見做すことができる。よって、群れの人数×一人当たり腸内細菌のタイプと数量は、採取する可食植物の土壌細菌のタイプと数量に同等なものに見做せよう。これらの腸内細菌が腸内で有機食品を分解し、土壌細菌が有機野菜を分解して、吸収可能な無機質に変える。腸内細菌が土壌細菌と同等でといわれる所以である。

土壌細菌、腸内細菌には、それぞれ善玉細菌と悪玉細菌がある。悪玉細菌を殺すために農薬や抗生物質を使うと、大方の善玉細菌も殺すことになり、土壌細菌、腸内細菌ともに多様性のバランスを失う。そして、可食植物の栄養素が脆弱になり、人間の腸の消化吸収能力の劣化を招く。よって、ウイルスや病原菌に対する免疫システムが劣化する。コロナウイルスに負けないように免疫力を高めるには、日常的に、繊維質のしっかりした有機栽培の野菜や発酵食品を食することが必要条件である。

4. ポストコロナの社会のかたち

——地域社会での食糧と生鮮物の自給が原則——

21 世紀になって、為替と貿易の自由化に伴って、先進国とその多国籍企業が主導する新自由主義の経済ルールグローバリゼーションが広がった。未開地の森林・農業・水産・金属資源等の乱獲と物流を激しくし、ビジネスマン、ツーリストの往来も非常に頻繁になった。

先進国は内需が空洞化し、発展国ともに貧困の格差が拡大したが、中国には超富裕層や先進企業が生まれた。

開かれ過ぎた世界において、感染拡大の強い新型コロナウイルスのグローバルな拡大は凄まじい。2019 年 12 月に武漢で発生して以来、4 か月の間にコロナウイルス騒動は世界を席捲している。世界の人々の食糧も多くが農薬と遺伝子組み換えの大農法の農産物で、バランスの良い土壌細菌に育まれたものはほとんどない。昔懐かしい日本の風土での栽培された農作物と異なるモノが多い。

土壌は風土から産み出される。関西と関東の土壌の違いを見ると歴然としている。それぞれの土壌は異なった種類の農作物を生み出す。農業は地産地消が一番合理的であり、人々の免疫システムの強化につながる。

新型コロナウイルス騒動から、新自由主義グローバリゼーションがパンデミックする疫病に無力で、収束するまでに 2 年～4 年が予想されている今日、世界各国の経済社会活動、文化活動のほとんどを崩壊させうることが痛感される。

すでに、「ポストコロナ」の経済社会の在り方が模索されている。新自由主義グローバリゼーションに戻るべきではない。同じグローバリゼーションでも、多国籍企業の資本力によるものではなく、各国のローカリゼーションを基礎に、国の大中小の大きさに関係なく平和と対等平等の協定の下で、連帯・協同グローバリゼーションの経済活動の形が求められよう。一国で疫病が発生すると、ロックダウンのエリアが限られ、集中的に他国は支援することができる。